スーパーコンチネント 超大陸

三題噺「コーヒー/滑り台/眼鏡っ娘」

いつもの帰り道の、いつもの公園。まだ時間も早いせいか、公園に は子供の数がちらほらと見受けられた。砂場に座り込んで山を作って いる者。滑り台に登っている者。

「ねえ、湯山くん。スーパーコンチネントって知ってる?」 横を歩く先輩が突然聞いてきた。

「なんですかそれ」

「超大陸よ」

「超大陸……、パンゲアですか?」

パンゲアとはかつて地球に存在した巨大な大陸である。この大陸が 地殻変動により分裂し、現在の六大陸が形成されたとされている。

「ええ、でもパンゲアは過去の大陸でしょ。スーパーコンチネントは 未来の大陸なの。なんでも 2 億 5000 万年後の地球には、再びパンゲ アのような超大陸が出現しているらしいわ」

「へえ。さすが萩原先輩。物知りですねえ。ところで、今度は何に影響されたんですか」

「ふふふん。えっとそれはねえ~」

嫌味を込めたつもりセリフだったのだが通じなかったようである。 先輩は眼鏡のブリッジに中指を当て、得意げに話を続ける。 「この間、テレビを付けたら国営放送の科学ドキュメンタリーがやってたのよ。ダフトパンクみたいな格好をした未来人が 2 億 5000 万年後の地球を調査する話。最初は何の気なしに見てたんだけど、これがまた中々に面白くてね~。あ、ちなみにその未来人、最後は死んじゃうんだけどそのシーンが——」

言っちゃ悪いが先輩は何かと感化されやすい。バトル漫画に影響されてオリジナルの特殊能力を披露してみたり、深夜アニメに影響されて萌えキャラのあるべき姿を語ってみたり。そのたびに振り回されるのはいつも相方の湯山だった。

「で、それが今度書く小説と何の関係があるんですか」

二人は数年前から『萩の湯』というペンネームで創作活動をしている。アイデアを出したり、世界観を練るのが先輩の仕事。キャラクターや細部のシナリオを考えるのが湯山の仕事だ。以前から書いていた小説がこの間完成したので、最近はもっぱら次回作の構想を練っている段階である。先輩がこういう話をするときは、何らかの形で創作に関係していると相場が決まっているのだが……。

「そうね……。じゃあ」

先輩はあたりをきょろきょろと見回し、子供の戯れている砂場へと 早足で向かった。そして、山を作っている子供たちの前でおもむろに 立ち止まる。

「ごめんね、お姉ちゃんたち、この砂場使いたいの。代わってくれないかな?」

ぽかんと先輩を見上げる子供二人。無理もない、突然、人民服をま

とった高校生に砂場を譲ってくれと頼まれたのだ。

「お願いっ! このジュースあげるからさ」

先輩はそう言って肩に掛けたメッセンジャーバッグから二つの紙パックを取り出し、戸惑う子供に無理やり押し付けた。学校の自動販売機で売っているカフェオレである。いくらミルクが入っているとはいえ、コーヒーなど渡して子供が喜ぶのだろうか。

「さて」

子供を砂場から追いやると、先輩は立ち上がって湯山の方に向き 直った。

「じゃあ、湯山くん。今から言うもの取ってきて」

砂場に戻った湯山が目にしたのは、両手を泥まみれにした先輩の姿と、その足元に作られた直径 50cm はあろうかという砂の台地だった。「あ、お帰り」

湯山の姿に気付いた先輩はにっこり笑ってこちらを振り返る。

「はい、雑草たくさん。言われたとおり取ってきましたよ」

両手いっぱいに鷲掴みした雑草を先輩に手渡す。すぐ近くの草むら で引きちぎったものだ。

「うん。ちょっと少ないけど、まあいいわ。それと……」 「木の枝と小石ですよね。ちゃんと持ってますよ」

湯山はそう言ってズボンのポケットに手を突っ込むと、そこから一本の棒と小石を数個取り出した。

「はあ、勘弁してくださいよもう。枝や小石はともかく、何で学校帰

りに草むしりなんてしなきゃいけないんですか」 「ごめんごめん。虫に刺されなかった?」

「幸いにして大丈夫でしたよ。最近は結構寒いですからね」

「ああ、そうか。もうそんな季節なんだ。早いな……」

先輩が夕焼けの秋空を見上げる。憂いを帯びたその表情が湯山の胸にチクリと突き刺さった。湯山が先輩と小説を書き始めて既に1年と数ヶ月。結成当時1年生だった湯山も今では2年になり、2年生だった先輩は3年になっていた。

「先輩、進学とかどうするんですか?」

「うーんまだ決めてないけど多分、そのまま残ると思う」

そのまま残る、とは付属の真浜大学へ進級するという意味だ。

「そっか。先輩、頭良いですもんね……」

湯山は思わず寂しそうな声を漏らしてしまう。付属大学への進学が許されるのは一部の勉学優秀者だけである。湯山の成績では内部推薦の獲得は相当に難しい。先輩が真浜大学への進学を希望する以上、『萩の湯』の解散は時間の問題だと言えた。

「俺、頑張って勉強しますよ。勉強して……、絶対に先輩と同じ大学 に行きます」

湯山は精一杯強がってみせる。そんな宣言だけで簡単に成績が上がるなら苦労はしない。湯山の言葉があてにならない口約束であることは、誰の目からも明白だった。けれど先輩は、そんな湯山を意外そうに見つめると、

「うん。楽しみにしてるよ」

そう言って優しく微笑みかけてくれた。大きな黒縁の眼鏡が夕日を 受けてきらりと輝く。『眼鏡っ娘』を自称する先輩のマストアイテム だ。正直、まったく似合っていない。けれど、眼鏡を外した顔が誰よ りも可愛いことを湯山は知っていた。

「それで、結局何なんですか? その砂山」

先輩は「あっそうだった」と小さく声を上げると、咳払いをひとつ して切々と語り始める。

「それは、宇宙のどこかの星の話――。大昔の地球か、遠い未来なのか、はたまた別の惑星なのかもしれない」

先輩は足元の、砂でできた台地をそっと指さす。

「その惑星には延々と広がる海と、そこに浮かぶ、たったひとつの大 陸があるの」

「大陸?」

「そう。ユーラシア大陸なんかよりも、ずっとずっと広い大陸がね。 ところで湯山くん。こんなに大きな大陸があると、その上ではどうい うことが起こると思う?」

突然の問いかけに、湯山は意表を突かれる。大きな大陸。大きいってことは頑丈で動きにくいってことだから……。

「じ、地震が少なくなるとか?」

「違う」

自説はあっけなく一刀両断された。

「大陸があまりに大きいとね、湿気を含んだ海の風が内陸部まで届か ないの。森林は大陸の淵を囲うように広がるだけで、陸地の大半では 延々と死の砂漠が続いている」

先輩は湯山が取ってきた雑草を手に持つと、台地を縁取るように乗せていった。

「ここには人が住んでいるんだけど、人だって生物だから、水や緑がないと生きられない。だからこの大陸では、海岸線にそって都市国家が形成されているの」

今度は小石を手に取り、雑草の上にひとつずつ置いていく。泥まみれの細い指と、小石を置く慎重な手つきが妙にアンバランスに思えた。「この世界の科学技術は未熟だから、大陸の中心部に何があるのかまったく分かっていない。神話や伝承が、かろうじてその一部を伝えているだけ」

先輩は砂場の隅の、まだ新しい真っ白な砂を手で掴む。そしてその砂を、台地の中心部にパラパラと振りかけた。水分を含んだ黒い土が、白い砂に覆われていく。

「なるほど、つまり……」

先輩が砂を撒き終わると、そこには広大な砂漠が出来上がっていた。 単なる砂山でしかなかった台地は、今や超大陸として二人の間に 鎮座している。

「つまり、これが次回作の舞台ってわけなのか」

「そういうこと。でね、湯山くん。この大陸の中心にね」

先輩はそう言って最後に残った小道具――木の枝を手に取ると、それを勢いよく大陸の真ん中に突き刺した。

「『何か』があったら面白いと思わない?」

不敵に口元を釣り上げる先輩。まるで悪巧みをしている子供のよう な表情である。

「何か?」

「それは今のところ未定。古代技術が眠っている旧時代の遺跡かもしれないし、存在しうる全ての書物が収められたバベルの図書館かもしれない。決めてないけど、そういうすごいものよ。大陸の中心にある『何か』を探して砂漠を旅する主人公……。面白そうでしょ?」

満面の笑みを浮かべる先輩とは対照的に、湯山の胸裏には不安しかなかった。『何か』ってなんだ? 設定だけ並べられても肝心の『何か』が決まらなければ、ストーリーの組みようがないじゃないか。その上どうも中世風の世界観らしく考証が難しそうである。「面白そう」どころか、できれば避けたい類の話だった。

「えっと……」

湯山がそう伝えようと口を開きかけたそのとき。

「うわわっ!」

子供が一人、ものすごい勢いで滑り台から降りてきた。地面に両足を付けたその子は、つんのめりながら二人の間を駆け抜けていく。

「あ……」

超大陸は、あっけなく踏み潰された。

森林がなぎ倒され、都市国家は海に沈み、クレーターが痛々しい傷跡となって大地に刻まれる。秘宝の在り処を示す木の枝は、天変地異の余波によってあらぬ方向へ飛んでいってしまっていた。

「せ、先輩……」

肩を震わせる先輩。これはまずい。早く何とかしなければ。 「先輩、落ち着いて――」

「おい糞ガキ! 待てやこらぁ!」

湯山がなだめるより先に、先輩は叫び声と共に走りだした。一瞬見 えた表情に浮かんでいたのは憤怒の感情。こうなると下手に手を出さ ないほうが懸命である。湯山は何をするでもなく、走り去っていく先 輩の背中をただひたすらに眺めていた。

「はあ……」

先輩の怒声が遠くなる。うつむいてため息をつくと、踏み荒らされ た超大陸が目に入った。

――面白そうでしょ?

先輩の自信に満ちた笑顔が脳裏をよぎり、湯山は苦笑する。さっき は否定的な言葉が喉まで出掛かったが、言わなくてよかったと思う。 「まったく……。変な話になっても知らないぞ」

そうだ。拙い話でもいいじゃないか。別に出来の良い話が書きたく て創作活動を始めたわけではない。

先輩と一緒に何かを作りたい。

それこそが自分にとっての動機だったはず。大切なのはその過程であって、出来上がったものなんて二の次だ。単純なことだったのに、良い物を書こうとするあまり、長らく忘れてしまっていた気がする。

子供の笑い声が遠くで聞こえた気がした。

そういえば先輩はどうなったのだろう。さすがに子供に暴力は振る うような人ではないが、いかんせん帰りが遅い。ひょっとすると、子 供を追い掛け回しているところを保護者に見つかって、お小言の一つ や二つでももらっているのかも知れない。

探しに行ったほうがよさそうだ。そう思った湯山は砂場に背を向けて歩き出す。頭上の秋空は紫がかったオレンジのグラデーション。航空機が真新しい飛行機雲を吐き出していた。

「泣いても笑ってもあと1年……、だな!」 飛行機雲が、ゆっくりと形を変えていく。